

3.7cm砲では装甲を貫けない Ⅲ号戦車E型

45口径3.7cm砲、装甲厚30mm、トーションバー・サスペンションの柔軟な足回りを持つドイツ戦車。車長が指揮に専念できる3名用砲塔でスベック以上の戦果を上げた。しかしソ連側が繰り出してきたT-34中戦車やKV-1重戦車には全く歯が立たず、主砲を5cm砲に換装したり、装甲を50mmに増厚するなどの措置が急ぎ施された。

3.7cm KwK36 L/45

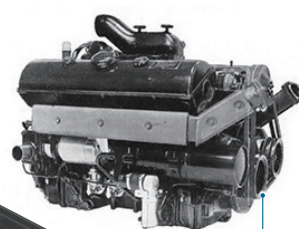
砲身長45口径の3.7cm砲で、射距離500mでの装甲貫徹力は31mm

砲塔 車長、砲手、装填手が収まる3名用砲塔。前面の装甲厚57mm

起動輪

トーションバー・サスペンション

E型より棒のねじり方向の弾性を利用したサスペンションとなり、不整地での乗り心地が格段に向上した



マイバツハ HL120TRMエンジン

Ⅳ号戦車と同じ型式で、4ストローク12気筒、296馬力のガソリンエンジン。ドライブシャフトを通じて、前方の起動輪を駆動する

DATA 乗員5名、重量19.5t、全長5.41m、全幅2.91m、全高2.44m、武装3.7cm砲×1、7.92mm機銃×2、最大装甲厚30mm、速度40km/h[E型のデータ]

名軽戦車の命運もここまで

38(t)戦車

元々は1939年から量産に入ったチェコ製の新型戦車LT-38で、同年のチェコ併合によりドイツは自国の装備に組み入れ、38(t)戦車とした。バルバロッサ作戦ではドイツ第6装甲師団に装備されている。装甲、火力はⅢ号戦車と遜色なく、機動性に優れていたが、ソ連戦車相手に力不足なのは否めなかった。

2名用砲塔

初期のⅢ号戦車と変わらない武装を持っているが、車長が砲手を兼ねるため、戦闘効率が悪かった。

板バネ式 サスペンション

板バネを使った保守的な足回りだが、3ヶ月半で5,548kmを走り込んだ実用試験では、一度も故障しなかった堅牢なもの。

DATA 乗員4名、重量9.85t、全長4.61m、全幅2.14m、全高2.25m、武装3.7cm砲×1、7.92mm機銃×2、最大装甲厚50mm、速度42km/h[E型のデータ]

ソ連戦車の先進性に驚愕するドイツ機甲部隊

バルバロッサ作戦に投入されたドイツ戦車は、前年のフランス侵攻で活躍したものと同一あるいは改良型だった。主力戦車たるⅢ号戦車は、3.7cm戦車砲から砲身長42口径の5cm戦車砲を持つタイプに更新され、Ⅳ号戦車は短砲身の7.5cm砲搭載のままだった。また部隊によつてはフランス戦以来の機動性能の優れた3.7cm砲搭載のチェコ製軽戦車35(t)または38(t)を装備していた。これらはソ連戦車の大部分を占めた旧式なT-26やBTなどの軽戦車（いずれも45mm戦車砲搭載）に充分対抗できた。

しかしソ連が前年までに開発し、配備を開始した長砲身76mm戦車砲を装備し、重装甲を纏ったT-34中戦車やKV-1重戦車に対しては、いずれのドイツ戦車も対抗不可であり、これらの戦車に直面した際は、8.8cm高射砲のような目的外の大口徑火砲を呼ぶしかなかったのである。

ドイツ機甲部隊がそれでもバルバロッサ作戦を優位に進めたのは、緒戦で獲得した制空権下、Ju 87急降下爆撃機（スツーカー）など空からの強力な直接支援、個々の戦車にまで通信機器を搭載して確保したコミュニケーション能力を確保したこと。そしてポーランド、フランスの戦闘経験で磨かれた技量を持つ将兵で構成されていたことによる。